

音源の比較試聴(1)

—バッハ無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ—

1. 始めに

各種音源の再生経路に関して種々の対策を行ってきましたので、この機会に各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログアキュライザーの導入を契機に各種音源の比較を行い、[アナログアキュライザーの展開\(1\)](#)から[アナログアキュライザーの展開\(39\)](#)まで報告してきました。

その後、各種音源の再生経路に関して種々の対策を行ってきましたが、ちょうどBS101でバッハの無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータの全曲演奏会の放映がありましたので、この機会にこれらに関する各種音源の比較試聴を実施することにしました。

どのような対策がアナログアキュライザーの導入以降に各再生経路についてなされたか、主なものを拾ってみます。

まず、すべての再生について、TruPhaseから300Bアンプの入力にはバランスアナログアキュライザーを経由させ、300Bの真空管は新しく構築された製造ラインの300Bに変更しています。300BアンプからFAL C90EXWの接続にはスピーカーアキュライザーを介在させ、スピーカーアキュライザーからはスピーカーリベラメントでバイワイアリング接続しています。

アナログ再生では、フォノイコライザーのZANDEN Model 120を導入し、仮想アースのCristal Eにフォノケーブルのアースラインとともに接続しています。LINN LP-12にはターンテーブルアキュライザーを導入し、アームには毛糸のアームダンパーをセットしています。

CD再生は、EMT981はアース端子に仮想アースのCristal Epをセットしています。DMR-UBZ1による放送録画の再生経路のSonica DACにはアース端子に仮想アースのCristal Epをセットしており、DMR-UBZ1の空きRCA端子には自作の仮想アースを接続しています。

PCによるSTAGE+からのストリーミング再生では、LANアキュライザー、仮想アースのCristal Ep、フェルトダンブLAN端子などが効果を発揮しています。そしてPCにはUSBの空きポートに仮想アースのCristal E Jtuneを接続しています。

アナログ再生、DMR-UBZ1による放送録画、PCによるSTAGE+からのストリーミング再生、fidata HFAS1-S1によるSpotify Connectなどの再生は、ともにBrooklyn

DAC+を経由しており、Brooklyn DAC+のアー端子に仮想アースの Cristal E をセットしています。

また、アナログ盤や CD は再生前に CD クリーナーの処理を行い、LP-12 のアーム、フォノケーブル、EMT981 の引き出しのバランスケーブルも CD クリーナーの処理を行っています。

音源は上記のとおり各種フォーマットのバッハの無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータで、無伴奏パルティータ 2 番などを主に試聴していきました。

J.S.バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ

アナログ

Deutsche Grammophon 483-6927/6928/6929

Nathan Milstein (Vn)

STAGE+

シュロモ・ミンツ(ヴァイオリン)

CD

DECCA UCCD-1467

ヒラリー・ハーン(ヴァイオリン)

SONY Classical SICC 30087

ヒラリー・ハーン(ヴァイオリン)

ドイツグラモフォン UCCG-3351/2

ヘンリク・シェリング(ヴァイオリン)

SONY Classical SRCR 2677

前橋汀子(ヴァイオリン)

UNIVERSAL MUSIC UCCY-1050

千住真理子(ヴァイオリン)

SONY UZCL-1030

エンリコ・オノフリ(ヴァイオリン)

放送録画

BS101 2024.3.27.~3.28 放映

ファビオ・ビオンディ(ヴァイオリン)

Spotify Connect

堀米ゆず子 (ヴァイオリン)

神尾真由子(ヴァイオリン)

3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログのミルシュテインの演奏は、ヴァイオリンの機種は調べても分かりませんが、ミルシュテインがヴァイオリンの貴公子と称されるだけあって、端正で

落ち着いた音色での演奏です。

STAGE+のミンツの演奏は、上記のとおり、ルーターから PC に至る諸対策が効果を発揮しており、透明度が高く、適度にエッジのきいたストラディバリウスの音色が聴きどころです。

CD 2 枚のヒラリー・ハーンの演奏は、ともに透明度の高い細身で澄んだヴィヨームの音が聴きどころです。ヒラリー・ハーンの演奏は何回か演奏会で聴いており、どの曲か忘れましたが、アンコールでバッハを弾いた記憶があり、澄んだ音の印象があります。

CD のシェリングの演奏は、ゆったり目のテンポで、丁寧にガルネリを歌わせるオーソドックスな演奏で、とても古い収録とは思えない音質です。

CD の前橋汀子の演奏は、シェリング同様、ガルネリの演奏を演奏会で聴いています。シェリングより収録が新しいだけあって、ガルネリらしさが出ていますが、演奏は独特の汀子節です。

CD の千住真理子の演奏は、ストラディバリウス・デュランティですが、ガット弦で膨らみのある、しっとりした味わいのある演奏です。演奏会は 2 度ほど聴いていますが、曲はちがうものの音色は演奏会の記憶を呼び覚ましてくれます。

オノフリの演奏は、無名の 18c 制作のヴァイオリンだそうで、390Hz のピッチのチューニングと記載されており、オノフリの演奏は演奏会を聴いています。390Hz のピッチの調弦のため、落ち着いた音ですが、演奏は抑揚が強く、自由奔放で派手な装飾音符様の特異な演奏スタイルです。

以上の CD に共通して言えることはデジタル臭さがなく、以前にもましてアナログライクな雰囲気をつたえています。

放送録画のピオンディの演奏は、ほとんど聴く機会のない、ピオンディの弾くガエターノ・ガダニーニが聴きどころであり、上記のとおり再生経路の一連の仮想アースとスピーカーアキュライザーなどの効果で、深みのあるガエターノ・ガダニーニの音色があますところなく再現され、ピオンディの装飾音符気味の加わった独特のボウイングの様子が把握できます。

Spotify の堀米ゆず子は、ガルネリの演奏で、この曲も演奏会で聴いています。神尾真由子はストラディバリウス→ガルネリ→ストラディバリウスとヴァイオリンを替えているようで、2017 年よりストラディバリウス・ルビノフを使用しており、Spotify 収録と同じ CD が 2020 年発売ですので、ストラディバリウスによる演奏と思われます。別の曲では演奏会でも聴いています。

Spotify の堀米ゆず子も神尾真由子も、上記の LAN 受信経路の対策で、Spotify のロスレス配信とは思えないほどの音質向上が認められ、両者のヴァイオリンの音色の違いや奏法の差もはっきりと感じ取れます。

4. まとめ

上記のとおり、それぞれの音源と再生経路について対策の効果が確認されました。また、全体に底上げされ、アナログとデジタルの差、デジタル相互の差が近接し、音源の種類と再生経路に死角がなくなってきた印象です。結果としてヴァイオリンの機種による音色の違いとか、演奏技法の違いがよく把握でき、演奏家のバッハへの対峙の姿勢も分かるようになってきています。

以上